国立大学附置研究所・センター会議
Japan Council for Research Institutes and Centers of National Universities

文部科学省と国立大学附置研究所・センター　個別定例ランチミーティング

第79回　東京大学　東洋文化研究所（2024.4.26）

12:05－12:10(5分）　：東京大学東洋文化研究所の概要
所長　中島 隆博

12:10－12:25(15分）　：若手研究者からのプレゼン
准教授　田中 有紀

12:25－12:45(20分）　：質疑応答

東洋文化研究所

日本、アジア、世界の過去・現在・未来を
総合的に研究・理解する、アジア研究の世界的拠点

1941年	東洋文化研究所創立
1948年	外務省所轄東方文化学院を吸収
1966年	東洋学文献センター(東洋学研究情報センター)設置
1999年	アジア研究データベース構築開始
2001年	国際学術交流室設置
	Network for Education and Research on Asia (ASNET)研究部門(～2020年度)
2004年	国際学術誌*International Journal of Asian Studies*創刊
2009年	共共拠点認定(～2015年度)
2010年	アジア･アフリカ学術基盤形成事業 アジア比較研究のフロンティア(～2013年度)
	プリンストン大学東アジア学部、復旦大学文史研究院、台湾中央研究院社会学研究所と学術交流協定
2014年	Global Japan Studies (GJS) ネットワーク研究部門(～2021年度)
	研究拠点形成事業 新しい世界史共同研究拠点(GHC)(～2019)
2019年	東アジア藝文書院(EAA)
2021年	東洋文化研究所設立80周年
2022年	Global Asian Studies (GAS)プロジェクト
2024年	哲学場(P4NEXT)

顕著な受賞歴

文化勲章	4名
文化功労者	7名
紫綬褒章	9名
学士院賞	10名
唐奨	1名

最近の特筆すべき受賞

- 和辻哲郎文化賞
- 日本学術振興会賞(2名)
- 日本学士院学術奨励賞
- 東方学会賞
- フランス政府教育功労章 将校(オフィシエ2等)
- 中曽根康弘賞優秀賞(2名)
- 大平正芳記念賞・特別賞(2名)
- 大同生命地域研究奨励賞(3名)
- 三島海雲学術賞
- 国際開発研究・大来賞　他多数

文化勲章受章者

1991年 江上波夫 騎馬民族征服王朝説

1998年 山本達郎「平成」の名付け親

2001年 中根千枝　東大初の女性教授

2017年 斯波義信　東洋のノーベル賞「唐奨」

第1期
組織的な国際化推進
研究資源の
デジタル化・
データベース化

第2期
国際的研究NW拡大
共共拠点
国際共同教育の推進
による研究者育成

第3期
アジア研究の国際的Hub拠点
社会と連携した研究PG推進
アジアにおけるアジア研究
の成果を英語発信

組 織

東京大学東洋文化研究所

- 東京大学
  - 東洋文化研究所
    - 研究部門
      - 汎アジア研究部門　アジア諸地域における社会・文化の変容過程
      - 東アジア第一研究部門　東アジアにおける国家権力と社会経済構造
      - 東アジア第二研究部門　東アジアにおける多元的文化の形成と展開
      - 南アジア研究部門　環ベンガル湾地域における文明・文化の交錯
      - 西アジア研究部門　西アジア文化の歴史的形成と現代的課題
      - 新世代アジア研究部門　アジアに関する新たな研究領域の開拓
    - 国際学術交流室／URA
    - 東洋学研究情報センター
    - 図書室

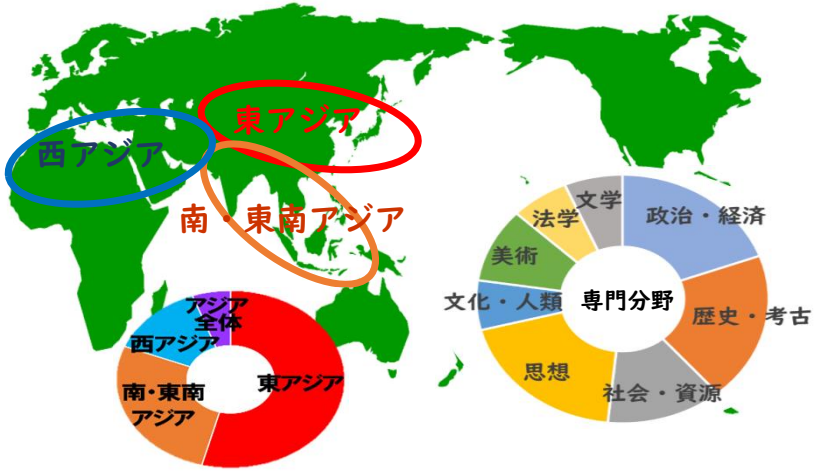
R6年4月現在

教員総数	教授	准教授	助教
30	15	10	5

■ 教員の多様性

外国人　2名（7 %）

女　性　9名（30 %）



■ データベース

多様性なデータ　古代～現代 9言語

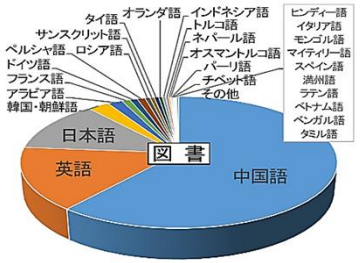
- 漢籍善本全文影像資料庫　年間 2千万 PV
- 「インド史跡調査団」データをMITのOA資料サイトでも公開

■ 蔵書 (2024年3月現在)

蔵書の多様性

東方文化学院旧蔵書（10万冊）、東京銀行調査部旧蔵資料（1万8千冊）、大木文庫（中国法制関係書）4万冊、アジア各国の古文書、研究書コレクション等

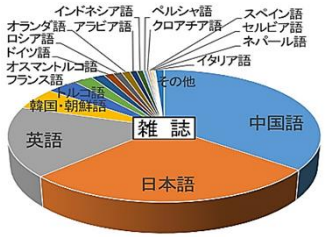
28言語70万冊



707,498冊

所蔵漢籍　24万冊

漢籍書誌遡及入力　7万冊



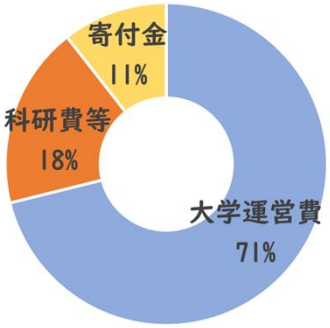
9,088誌

研究費獲得状況・研究成果

東京大学東洋文化研究所

■ 寄附金・外部資金受け入れ

□ 2024年東洋文化研究所部局基金創設
企業からの外部資金受入を強化



■ 教員の科学研究費補助金獲得状況

東文研所属URAの支援による外部資金獲得

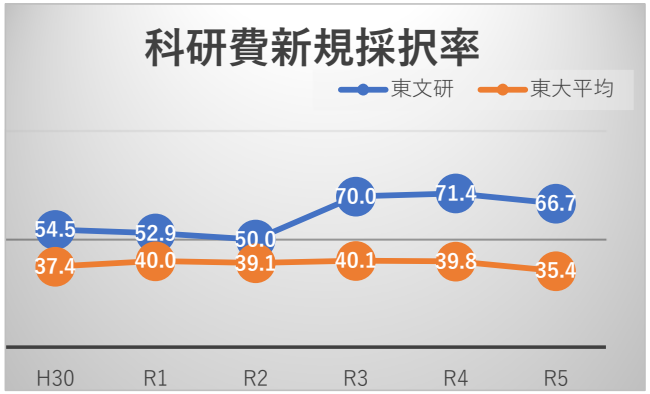
2022年度の状況

□研究代表者　**72**%（26課題）

□代表者、分担者　**181**%（65課題）

2023年度新規採択率　**66.7%**

（東京大学 採択率 35.4%）



研究成果：第3期実績（研究者数延べ155人）

著作数：120　論文数：479

うち外国語業績：183（英語、中国語、韓国語、ペルシャ語　ほか）

社会への波及効果

東京大学東洋文化研究所

■ 展覧会

□ 東京大学東洋文化研究所の貴重図書（2009年）
奈良国立博物館

『史記』（宋版 建安黄善夫刊）、『論語』
（正平版 日本14 世紀）などを展示

□ Heritage of Delhi（2018 、2019年）
インド国立博物館、
国際交流基金ニューデリー日本文化センター

所蔵イスラーム建築遺構写真を主題とする写真展

□ 東洋学への誘い（2019 年）
神奈川県立金沢文庫

漢籍善本、敦煌遺書、キジル壁画など100点を展示

■ 公開講座

「アジアを知れば世界が見える」をコンセプトに、
所員が研究成果をわかりやすく解説

過去5回年の開催実績

2017年 アジアの知
2018年 アジアの教
2019年 アジアの働
2022年 アジアの書

2023年 アジアの技
田中准教授
「中国天文学の思想と技術」
Gerteis准教授
「バーチャル軍艦島プロジェクト」

2023年度参加者：96人
会場 27人　オンライン 69人

■ 新聞記事掲載

新聞でのコメント・寄稿

中島教授「分断のいま「普遍」を鍛え直す」朝日新聞

真鍋教授「民主化つかんだ地　韓国の「義郷」朝日新聞

松田教授「中国軍事演習危機感の表れ」毎日新聞

佐橋准教授「試練続く米中に協調の芽」朝日新聞

川本研究員「祈る、ミャンマーを慈しむ　日本で願う祖国の平和　国軍クーデターから２年」朝日新聞　など

所内での共同研究

東京大学東洋文化研究所

Global Asian Studies (GAS)

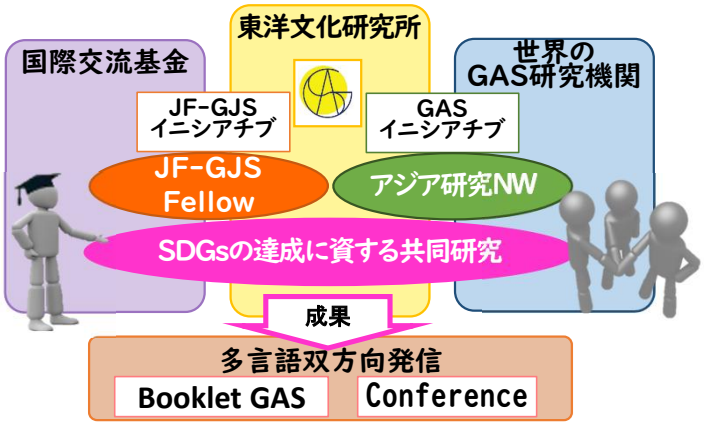
アジアからの視点によるアジア研究アジェンダの
再定義（アジア研究のアジア化）を推進（2022～）

■JF-GJSイニシアチブ（東文研 × 国際交流基金）

- JF-GJS Fellowship Program：海外の若手日本研究者を東文研に長期招へい。研究会などのファシリテーターとしての経験を積み、国内外関係者とのネットワーク形成（2023年 3名着任）
- **Japan Foundation Fellow Conferenceを毎年開催**
- JF-GJS Joint Workshop：世界の日本研究拠点大学共同開催（ベルリン自由大、北京外大等）

■GASイニシアチブ

- GAS Joint Workshop：GAS研究ネットワーク構築（南洋理工大、台湾大学等）
- SDGsの達成に資する異分野融合国際共同研究（気候と社会連携研究機構）に参画
- GAS lecture series：最先端のアジア研究手法を開拓



中国絵画デジタル・アーカイヴ・プロジェクト

- 60年以上継続している所内共同研究プロジェクト
- 世界に散在する中国絵画を網羅的に調査・撮影し、データベース化するとともに図録として継続してシリーズ刊行
- 中国美術史研究に必須の基本史料として、世界の何処にどのような中国絵画があるか、その全容を可視化し、美術史学に必要な学問の土台を構築

『中國繪畫總合圖録』
1982-2020 年にかけてシリーズ刊行

1: アメリカ・カナダ篇
2: 東南 アジア・ヨーロッパ篇
3: 日本篇I. 博物館
4: 日本篇II. 寺院・個人
5: 総索引

「續編」
1: アメリカ・カナダ篇
2: 東アジア・ヨーロッパ篇
3: 日本篇
4: 総索引

「第三編」
1: アメリカ・カナダ篇 I
2: アメリカ・カナダ篇 II
3: ヨーロッパ篇
4: アジア・オセアニア篇
5: 日本篇
6: 総索引

学外・研究者コミュニティとの共同研究

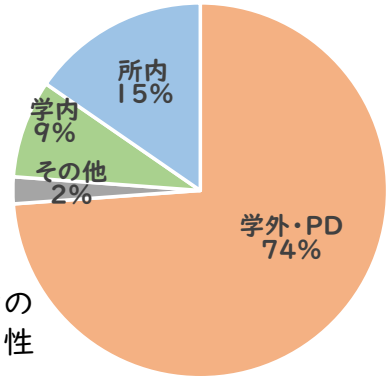
東京大学東洋文化研究所

■ 班研究（共同研究）

所員が核となり所外の研究者らと社会課題解決に資する異分野融合共同研究を推進

□ 2023年度
班研究：　24班
参画研究者：約260名

参画研究者の属性



- □ 東アジアの安全保障研究（松田教授）
- □ アジア資料・情報の再編と可視化（中島教授）
- □ 南アジア農村社会の歴史的研究（古井教授）
- □ 「スンナ派」と「シーア派」：自己意識と相互認識のイスラーム史（森本教授）
- □ アルジェリアの社会経済（渡邉准教授）
- □ アジア法史（額定其労准教授）　など

■ 東文研セミナー

班研究や共同研究プロジェクトなどの最先端の研究成果を研究者間で共有し、発信する場として、セミナーを随時開催

□ 2022年度　　開催実績　23回

■ 研究者の受け入れ

国内外からPDや研修員を受け入れ、共同研究を実施

□ **過去5年の実績**

学振PD	20人
学振外国人PD	6人
私学研修員	10人
博士号授与	18人

国際展開（国際連携プロジェクト）

東京大学東洋文化研究所

東アジア藝文書院 (EAA)

ダイキン―東大産学協創協定の下、東京大学と北京大学が共同運営するジョイント研究・教育プログラム（2019～）

潮田総合学芸知イニシアティヴ(UIA)

アジアの思想・技芸・文化・社会に対して総合的な研究を実施（2022～）
北京大や延世大、NY大など海外有名大学と研究協力を推進

□ 社会連携による研究成果の還元

研究部門として、本学のダイキン東大ラボ「空気の価値化ビジョン社会連携研究部門に参画
社会的共通資本としての空気を守り育てる新たな社会システムを提案
新たな学知の共創に取り組む

若手人材育成や国際交流を強化

- □ 藝文学研究会・シンポジム・若手研究会
- □ 特任助教、特任研究員の雇用
- □ 外国人研究者の招へい
  R5年度　金 杭教授
  （延世大学）
- □ 海外の大学、研究機関と研究協力

国際展開（組織的国際連携）

東京大学東洋文化研究所

■ 海外学術機関との交流協定

フランス社会科学高等研究院・ボン大学・
・北京大学・延世大学・テヘラン大学・
カイロ大学・シカゴ大学など16機関

- □EHESSとの研究者相互派遣
- □復旦大学との研究者相互派遣
- □復旦大学文史研究院でのサマーセミナー
- □中央研究院社会科学研究所との若手社会学者共同WS
- □成均館大・延世大との合同シンポジウム

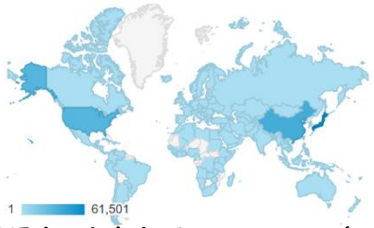
2019 アジアの女性
2021 アジアの災害
2022 アジアにおける越境

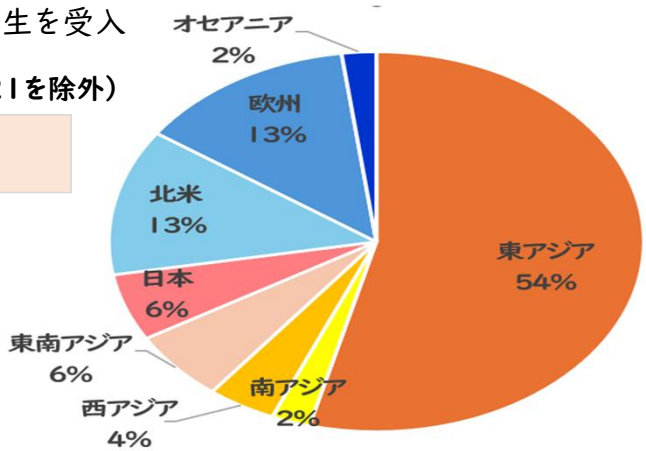
■ 海外からの訪問研究員

海外研究機関の研究者、院生を受入

過去5年の実績（2020・2021を除外）

35か国 325名





世界中から東文研HPへアクセス（2022年）

■ 著名外国人特任教授

世界の著名教授を客員教授として招聘
強力な研究ネットワークを構築

2018年度	A. Stanziani(**EHESS**)
2019年度	張旭東(**NY大**)
2020年度	R. Chard(**Oxford大**)
2022年度	M. Sefatgol(**Tehran大**)
2023年度	M. Radich (**Heidelberg大**)

■ 国際共同教育

世界の著名大学と共同して、サマースクールやWinter Instituteなど国際的教育プログラムを企画、実施

国際展開（国際成果発信）

東京大学東洋文化研究所

■ International Journal of Asian Studies (IJAS)

（東文研 Cambridge Univ. Press）

アジアに関する、主に人文・社会科学の研究成果を全世界から募集し、東文研が編集、英語による国際学術雑誌としてケンブリッジ大学出版局から出版
2004 年の創刊以来、年2冊、現在までに第21巻1号まで刊行

2022年度実績

投稿数
20か国126本
（2016年：77本）
採択率27%

Online Article Usage
38,500回
（2016年：12,700回）

国際的editor構成
11か国 21名

■ 英文図書刊行 （東文研 社会科学研究所）

東大研究者による人文・社会科学系英文図書の刊行を英文エディターが支援

■ The University of Tokyo Studies on Asia 東京大学東洋文化研究所アジア研究叢書

（東文研 Springer Nature）

優れた日本語によるアジア研究論文・学術書を東文研が選考、英訳しSpringer Natureから無料でダウンロードできるシリーズとして出版（東大基金での募金による）

刊行予定 年 2冊

国際的Advisory Board 11か国 16名

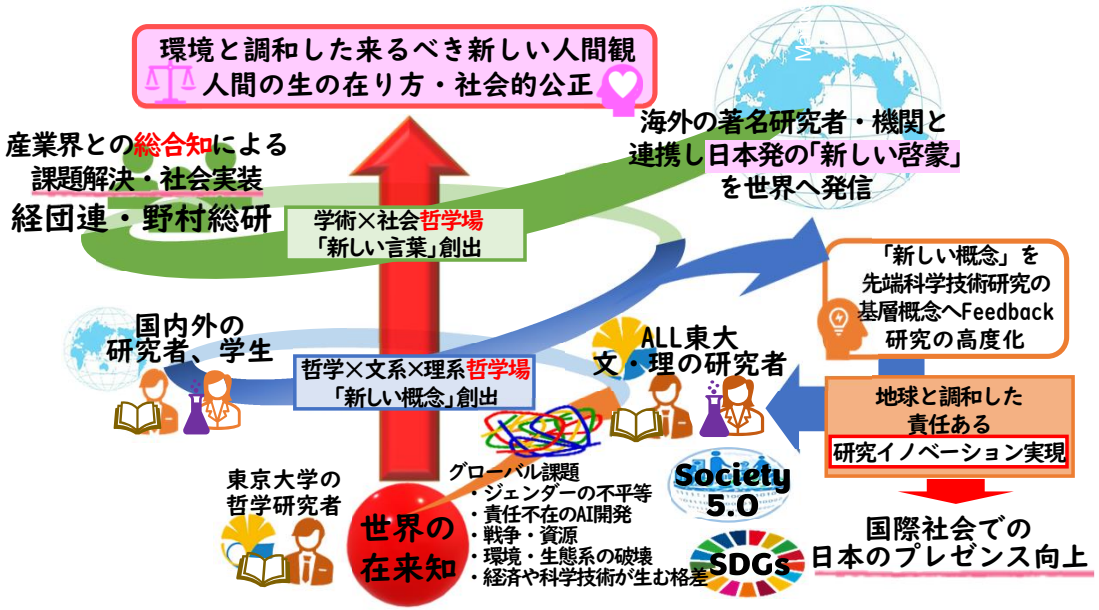
異分野融合研究　哲学場：Philosophy for New Enlightenment × Technē（P4NEXT）

概要　人間中心主義的な世界観から、環境と調和した新しい人間観へパラダイムシフトするためのプラットフォームである「哲学場」を構築・運用
本学の哲学分野の研究者を核に、学内や世界の文・理の研究者らとグローバル課題をテーマに対話を重ねる「哲学場」を運用し、「新しい概念」を創出する。その概念を研究者と社会が対話する「哲学場」において「新しい言葉」に翻訳し具体的な実践に落とし込み、社会に浸透させる（「新しい啓蒙」）。これにより、従来のGDP的な成長ではなく、能力だけでなく望む力が「花ひらく」方向へと社会的想像を更新する。

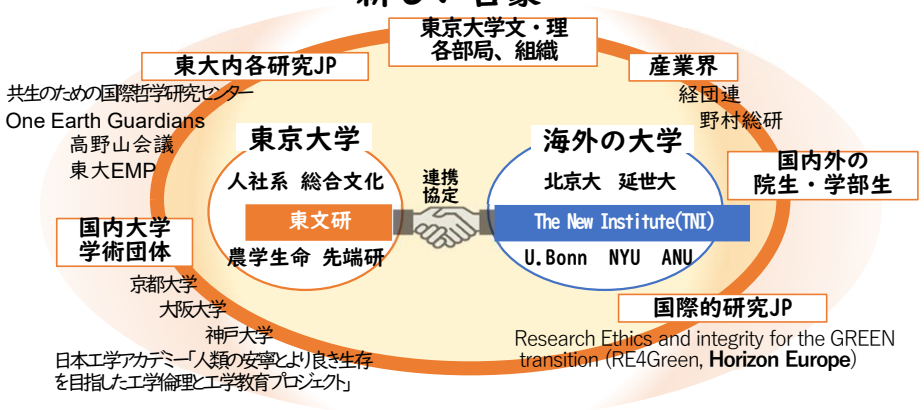
◆ グローバル課題をテーマとした哲学場（研究者×研究者、学術×社会）
◆ 海外の最先端研究プロジェクトや、本学及び東文研の研究ネットワークと連携するなど、積極的な国際連携戦略を展開
◆ 「哲学コンサルタント」による外部資金の獲得
◆ College of Designとの連携により東大発の新しいリベラルアーツ教育を実践

2023年度の準備状況
■「新しい啓蒙」のための対談・座談会を定期開催

4月　Yuk Hui×中島対談
　　「中国における技術への問いその後」
5月　M. Gabriel×中島対談「新しい啓蒙のために」
7月　座談会「先端科学技術と人文社会科学」
　　高橋（農学）納富（人社）宇野（社研）横山（Kavli IPMU）田中（東文研）
10月　座談会「責任あるAI」鳥海（工学）宍戸（法学）金杭（延世大）
11月　座談会「技術とは何か」吉村（経団連21研）小野塚（経済）
12月　座談会「倫理的未来を構想する」
　　三浦（薬学）杉山（先端研）山名（教育学）菊地（史料編）



新しい啓蒙



Research Ethics and integrity for the GREEN transition (RE4Green, Horizon Europe)

欧州グリーン ディールが構想する持続可能な経済と社会への移行を支援する国際共同研究
日本代表者：中島隆博（東文研所長）

中国における音楽と技術の思想

田中有紀
東京大学東洋文化研究所准教授

自己紹介

- 専門：中国思想史。特に、宋・明代の朱子学。
- 博士論文…十二平均律を発明した明の朱載堉
- 音楽・数学・天文暦法などの科学や技術に関する事象を、中国思想史の文脈で捉えなおす研究をしている。
- 2005年東京大学文学部卒、2012年人文社会系研究科博士課程修了。
- 2012年より立正大学経済学部に勤務、2020年に、東京大学東洋文化研究所東アジア第二研究部門に着任。
- 2008年～2010年、北京大学哲学系に留学。

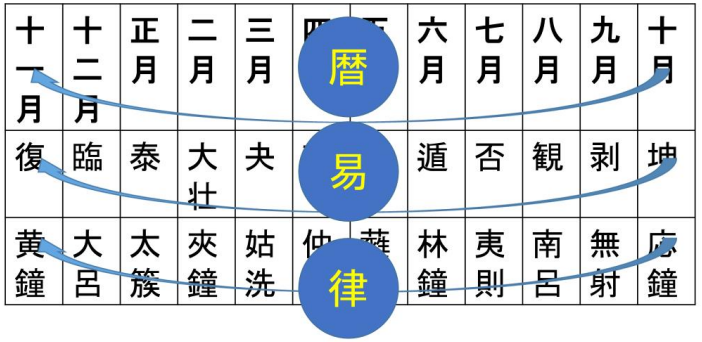
写真は東京大学出版会、風響社ウェブサイトより引用

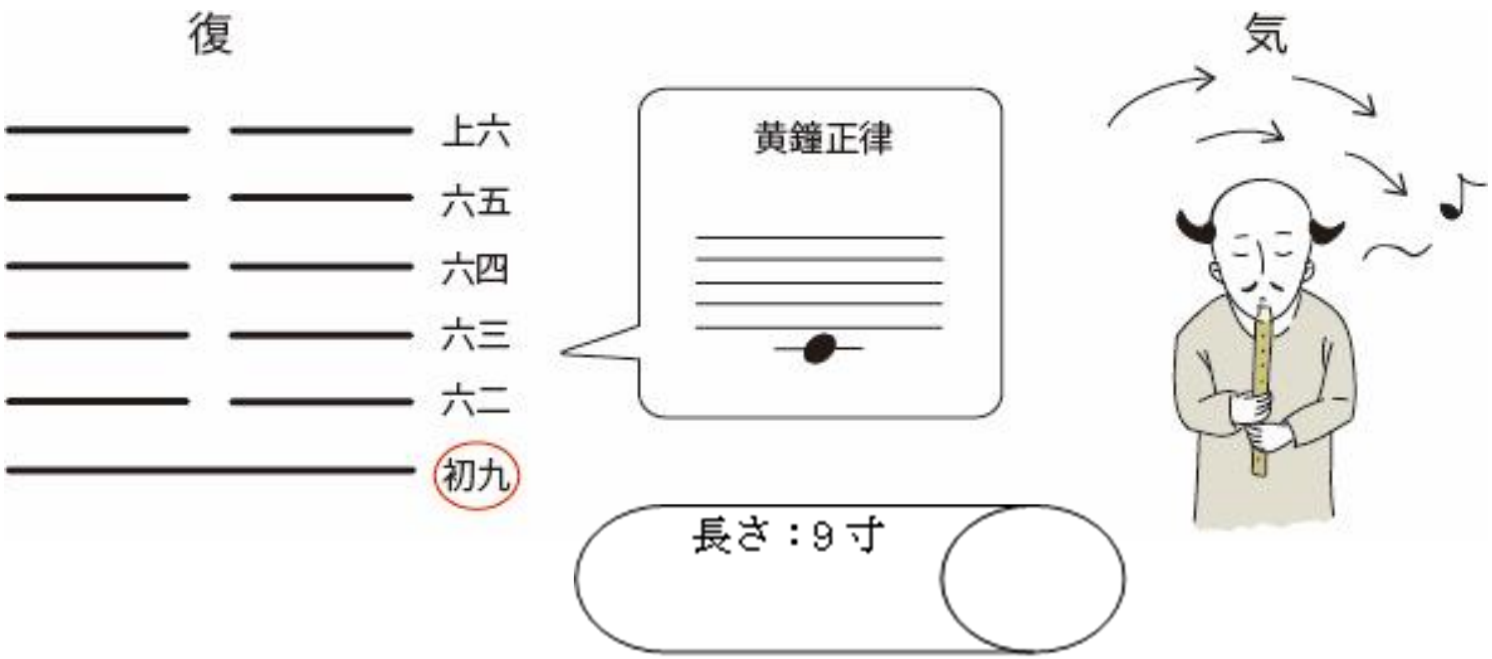
儒教と音楽：「調和」をもたらす楽

・四書五経の学問としての楽。
　政治を担う儒者によって、儒学として論じられた。
・「楽は天地の和なり、礼は天地の序なり」（『礼記』）
　・・・礼→人々に尊卑差等の階層秩序をもたらす
　　楽→礼を補い、人々に「調和」をもたらす
・「移風易俗」（『孝経』）
　・・・人々を教化する役割。
・王朝交替の度に音律を改定。
　⇒音律は、皇帝権力を表象する有力な手段。

音楽と易学、天文暦法、数学…

たとえば冬至の日には・・・





中国の目録学からみる中国音楽

漢籍の四部分類法
経部　：儒家の経典とその注釈。
※経学…儒家の学問。最も重んじられる。
史部　：歴史・政治・経済・地理。
子部　：儒家以外の学問。科学・芸術・宗教。
集部　：詩集や全集、詞や小説。

音楽は、どこに分類される？
清朝の図書目録『四庫全書総目』

- 経部：易類、書類、詩類、礼類、春秋類、孝経類、五経総義類、四書類、楽類、小学類
- 史部：正史類、編年類、記事本末類、別史類、雑史類…
- 子部：儒家類、兵家類、法家類、農家類、医家類、天文算法類、術数類、芸術類…
- 集部：楚辞類、別集類、総集類、詩文評類、詞曲類 …

最近の研究活動の紹介
Science and Aesthetics in Chinese Music

Sharing the Knowledge Lectures by Tōbunken Scholars, The University of Tokyo
2023.11.13　ナポリ東洋大学とのワークショップ

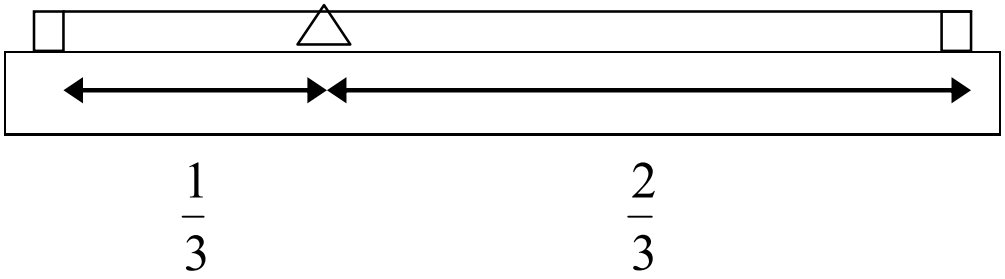
- 近代中国の学者たちが中国に「美学」を見出す際に注目したのは文学や絵画。中国音楽は「美学」の枠組みにうまく入らなかった。
- 一方で中国の音律学は「科学」として高い評価を受けた。

→魏晋南北朝時代の荀勗の笛律と嵇康の『声無哀楽論』を分析。両者が目指した「調和」とは？

- 中国音楽の「科学」と「美学」が目指した美は「調和」という概念で深く結びついている。
- 問題は、その「調和」の具体的なイメージが論者によって大きく異なること。その一つ一つを解き明かすことで、中国音楽の「美」を理解できるのではないか。

ギリシャの場合

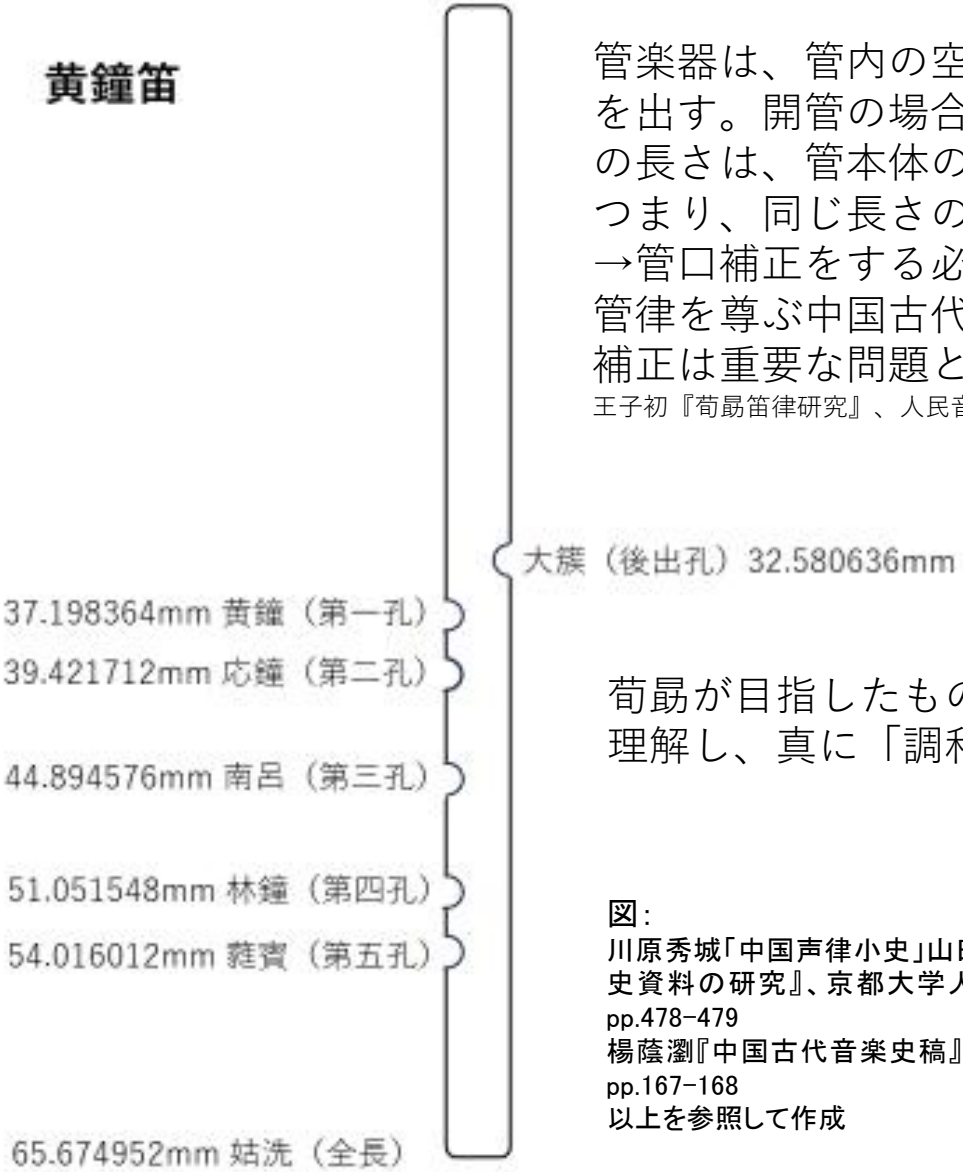
ピタゴラス律：モノコードを使用



中国の場合

三分損益律：律管を使用

黄鐘笛



管楽器は、管内の空気柱の振動によって音を出す。開管の場合、刺激を受けた空気柱の長さは、管本体の長さより長くなる。
つまり、同じ長さの弦音より低くなる。
→管口補正をする必要。
管律を尊ぶ中国古代音律学において、管口補正は重要な問題となった。
王子初『荀勗笛律研究』、人民音楽出版社、1995、戴念祖序を参照

荀勗が目指したもの…弦律と笛律の違いを理解し、真に「調和」する笛律を模索。

図:
川原秀城「中国声律小史」山田慶児編『新発現中国科学史資料の研究』、京都大学人文科学研究所、1985年、pp.478-479
楊蔭瀏『中国古代音楽史稿』、人民音楽出版社、1981、pp.167-168
以上を参照して作成

嵇康『声無哀楽論』

- 声無哀楽＝音楽に「哀しい」「楽しい」という感情は無い

「秦の客人」（儒家の礼楽思想を代弁）

VS

「東野主人」（嵇康自身）

８回分の論争をまとめたもの

- 音楽による移風易俗

儒家：

哀しい音楽⇔人間の哀しい感情（乱れた政治）

楽しい音楽⇔人間の楽しい感情（善い政治）

嵇康：

調和した音楽→和やかで穏やかな心（調和した社会）

- 音楽を人間の哀楽や政治の善悪と切り離し、音楽そのものの「調和」を重視。その「調和」こそが人間の感情を動かすと考えた。

Western and Chinese technology: Criticism of Jiang Yong's (江永) Yimei (翼梅) to Mei Wending (梅文鼎)
Exploring Asian Connectivities: Topics, Methods, and Implications
2023.3.24
南洋理工大学（シンガポール）
College of Humanities, Arts and Social Sciences
とのジョイントワークショップ

- 清の江永と梅文鼎の「二十四節気」に関する理論を比較。
- 梅文鼎：『授時暦』に代表される伝統的な暦では恒気。人々の生活に馴染んでいる恒気を用いるべき。
- 江永：「天は渾然一体で区切りはない」「節気は人間側の都合」「古の暦は簡易で、節気は後から加わったもの」だが、
- 『授時暦』のように、定気と恒気を併用するのは矛盾。
- 節気…太陽の運行という真理（「数の原理」）を、生活に役立てるための「数の技術」

→「技術」は「原理」は表裏一体、「原理」を把握した上で「技術」として応用できているかどうかが重要。

恒気法と定気法

藪内清『中国の天文暦法』、『藪内清著作集』第一巻、臨川書店、2017、pp.286－287

- 6世紀半ば、張子信が太陽運動の不等を発見

→隋の劉焯が、恒気の法（一年の日数を二十四等分して節気を定義）に代わり、定気の法（太陽が黄道上を行く度数によって節気を定義する）を提唱。

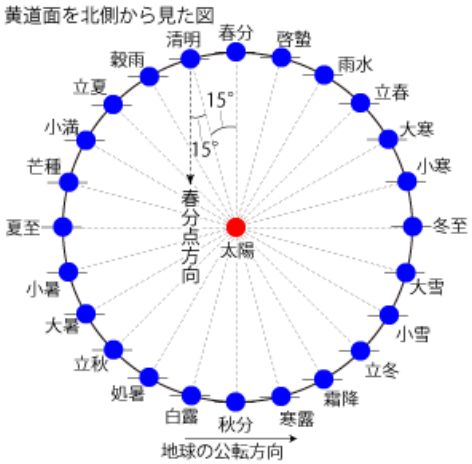
→しかし、定気法は実際の暦に採用されないまま千年以上経過。

- 清朝で西洋天文学による時憲暦が発布されるようになり、初めて定気法が採用された。
- 定朔法とならび定気法が採用されると、一か月の間に二つ中気が含まれたり、わずか数か月を隔てて中気を含まない月が生じたりする。

→従来の無中置閏法では対応できない。

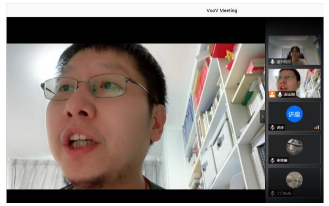
→新しい置閏法：冬至月を十一月に固定、前年の十一月から次年の十一月までの月数が十三か月の時には、無中置閏法によって閏月をおく。

※二個の無中気の月があれば、はじめの月を閏月とする。



国立天文台　暦Wiki
https://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/wiki/B5A8C0E12FC6F3BDBDBBCDC0E1B5A4A4CEC4EAA4E1CAFD.html

EAA（東アジア藝文書院）
GAS（Global Asian Studies）



2020～
日中韓オンライン朱子学読書会

EAAワークショップ
「北宋易学と近代科学」
2024.03.18　於東洋文化研究所

講演と演奏
「中国の思想と音楽の美」2023.9.17
千葉県長生郡一宮町

GAS Lecture series
“Music, Modernity and Mobility”
2023.09.24 オンライン